人類革命

人間革命

第九巻

池田大作

聖教新聞社

人間革命

第九巻

昭和51年10月12日　発行
昭和51年12月20日　第18刷

定価はケースに
表示してあります

著者　池田大作
発行者　美坂房洋

発行所　郵便番号 160
東京都新宿区信濃町18
電話 03（353）6111
聖教新聞社

落丁・乱丁本はお
取替えいたします

印刷　明和印刷株式会社
製本　株式会社　星共社

© D. Ikeda 1976 Printed in Japan

目

次

発端 3
小樽問答 73
展開 144
上げ潮 202
実証 251

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

人間革命

第九巻

装画　三川　芳端

挿画　悌龍　吉子

発端

いかなる大事件にも、その淵源がある。そこには、小さな現実が蠢いている。その些細と思われる現実の動向を決して軽んじてはならないだろう。

厳冬の北海道、小樽の街は、吹雪が夕方にやんだばかりであった。新しい雪が家々の屋根に積もり、坂の多いこの街の路上も雪が積もり、雪を蹴った足跡もまばらだった。

人通りのほとんど絶えた、この白一色の夜の街上に、黒い人影が三つ、ゴム長の足をせかせかと刻みながら歩いていく。街燈の下にくると、三人の吐く息は白かった。

北国特有のあの角巻を頭からかぶり、躰をすっぽり包んだ三つの人影は、はずんだ声で互いに語りかけながら坂を登り、角を曲がって、とある洋品店の戸をあけて中に入った。

小樽の草創期の創価学会会員にとって、いまも忘れることのできない昭和三十年二月二十五日

の夜、事件はこの洋品店から始まったのである。――角巻をぬいだ三人の婦人は、奥に向かって「お晩です」と、元気に声をかけた。奥の茶の間に通された彼女たちは、かじかんだ両手をストーブにかざしながら、洋品店の夫婦に話しかけた。

「あんた、信心やめたいって、ほんと？」

やや荒い口調で、詰問するように切り出したのは、小樽班の東恵子である。年輩の彼女は班長であった。

洋品店の大森夫妻は、東の視線をさけるように一瞬うつむいたが、夫の十郎は呟くように歯切れのわるい口調で言いだした。

「あんたがたには悪いと思うけれど、やはりうちにはうちの事情があって、この先とても御本尊様をお護りできそうもないのですわ」

「御本尊様をお返しして、どうするというの？」

奈良川スミは、案じ顔で大森夫婦に鋭い視線をなげた。彼女は東とコンビの班担当員である。夫婦は困惑して黙したままだった。

「馬鹿なことを考えるのはよしなさいよ。あんた、身延が恋しくなったのと違う？」

東恵子はおっかぶせるように、詰問した。

大森十郎夫婦が入信したのは、この二月三日のことである。まだ三週間しかたっていない。小樽の日蓮系寺院の信徒であった彼らは、創価学会の九谷貞枝の紹介で日蓮正宗に改宗したのだった。そして入信直後から、もともと耳の遠かった大森十郎が、いくらか聴こえるようになったと、九谷貞枝に語って夫婦で喜んでいたのも、つい数日前のことである。

それが、今日の午後、九谷のところへ御本尊の返却を言ってきたのだ。九谷は東班長に吹雪のなかを報告し、ちょうどそこに来合わせた奈良川班担当員と三人で相談の結果、吹雪のやむのを待って大森宅を訪れたのである。

「耳だってよくなってきたのじゃないの。ここが大事なところなのよ。迷っては駄目。勇気を出すのよ。いったい、やめてどうする心算なの？」

九谷貞枝はこう言って、大森夫婦を睨んだ。あれほど自身の体験を意識しはじめた夫婦が、急に退会すると言いだしたことが、彼女にはなんとも不可解であった。

大森夫婦は、三人の婦人の眼に射すくめられたように、無言で反発していた。そして、この空気に居たたまれなくなったのか、大森の妻は身をずらして傍らの茶箪笥から茶道具を出し、茶をいれようとしはじめた。

性急な東班長は、これを見ると相変わらず高飛車な言葉を吐いた。

「お茶を飲みにきたんじゃないわよ。この御本尊様は生きていらっしゃるんですよ。大切な新しい人生の出発のために戴いたこの御本尊様をどうして返却したいのか、それが聞きたいのよ。耳の遠いのもよくなってきたといって自分で喜んでいたじゃないの！」

大森十郎は顔をあげ、表情を強ばらせたまま東恵子を見た。

「……いくらか聴こえるようになっただけだよ。すっかり治ったわけじゃない」

十郎の不服そうな言葉に、東恵子はかっとなった。

「なにいっているの！　私たちがこうして来ているのは、なにもあなたがたに拝んでくれと頼んでいるのじゃありませんよ。考え違いをしないでください」

大森十郎もまた興奮して言い返した。

「あんたがたが、わしらを幸福にしてくれるわけではあるまいし、偉そうなことは言わんでくれ。わしらのことはわしらでやるから放っておいてくれ」

「そりゃそうよ。私たちにあなたがたを幸福にする力はない。凡夫だもの。だけどね、この御本尊様には、その力がちゃんとあるんです。私たちのためではなく、あなたがたのために不憫と思ってすすめてるのよ。それがどうしてわからないの？」

ただ感情的な思考に陥ってしまった大森十郎には、なにも理解できなかったばかりか、興奮し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た耳には、他人の言葉も聞き取りにくくなっていた。

「わしは自分で判断したまでだ。いくらなんと言われようと、嫌なものは嫌だ。さっさと持っていってくれ」

彼は仏壇に向かって歩みよった。東班長は、すぐさま立ち上がって、彼の腕をつかむと耳元で叫んだ。

「大森さん、話はわかりました。……お返しするなら妙照寺へお返しすれば、それでいいのよ。あなたが戴いたものなのだから、あなたが返却すればいい。私たちが受け取るわけにはいかないのです」

「そうか、そんならお前さっさと返してこい」

大森十郎は、こんどは妻に鋒先を向けて坐りこんだ。

彼の妻は険悪な空気を静めようと茶をいれて三人の客に出した。

奈良川班担当員は、意外に平静な妻に話しかけようとした。彼女はさっきから、この場に適切な御書の一節を思い出そうとして、やっとそれを思いついたところだった。

「奥さん、この御本尊様はね、護持することが難しいと、大聖人様もちゃんとおっしゃっているのよ。『受くるはやすく持つはかたし……』とね。それからなんといったかね、東さん」

奈良川は東に救援を求めた。東はせかせかと言った。
「ええと『持つは成仏なり……』違ったかな」
「ああ、そうそう。『……さる間、成仏は持つにあり』よ。ね、奥さん、今の世の中で、この御本尊様を持つことは、どんなに難しいかを大聖人様は、ちゃんとお見透しになっていらっしゃる。だから、幸福になるためには、この御本尊様をちゃんとお護りしていきさえすればいいんです。そのお護りしていくということが原因となって、こんどは自分自身が護られていくのです。それをお返しするなんて、とんでもないことです。私たちと一緒に、あなたがたも幸福になろうじゃありませんか。ともかく一年頑張ってみたら……」
「そうよ、そうよ。私たちもそうだけれども、大森さんもやっと、このすばらしい仏法にあうことができたばかりじゃないの。あとはお題目さえきちんとあげればいいんですから、誰に迷惑のかかることでもないでしょう。そのうちに、ご主人もあなたも、ほんとうによかったというに決まっています。いまは辛抱が肝心のときだと思って……」
組長でもある九谷貞枝は、紹介者としての責任から、大森の妻に懸命になって説いた。三人の婦人たちの説得はなおもつづいたが、大森十郎は頑として黙したままであった。
大森の妻は、十郎の顔色をうかがいながら、あなたどうするの——と、二、三度、十郎に返答

を迫ったが、十郎はなおも口を噤んでいる。
妻は仕方がなさそうに独り言を呟いた。
「私はどっちでもいいけれど、この人が頑固だからどうにもならない……」
このとき、大森十郎は憤然として叫んだ。
「なにッ、お前が嫌だといったんじゃないか。おれは知らん、勝手にしろ」
夫婦喧嘩になった。
十郎はさっと立って奥の部屋に入ってしまった。気まずい空気のなかで、妻は薄笑いを浮かべながら愚痴をこぼした。
「あのとおりなんですよ。短気で、わからず屋で……」
東恵子は夫婦喧嘩がもとで、御本尊返却にまで及んだのかと単純に考えた。そうだとしたら、自分たちは夫婦喧嘩に踊らされているにすぎない。よくあることだ。これは放っておけば、いつかおさまるだろう。なんだ、馬鹿ばかしい話だと、ひとまず安心しながら大森の妻に諭すように言った。
「わかったわよ。だから、あなたがしっかりしなくてはいけないのよ。まず、あなたが御本尊様をしっかりお護りしなくては、どうしようもないじゃないの。夫婦のことは、夫婦で話しあって

解決しなさい。それを信心をからませて喧嘩するなんて、とんでもない心得ちがいですよ。ご主人がどうあろうと、愚痴などいわないで、一家の宿命転換のために御本尊様にぶつかっていくのよ。わかった？」

大森の妻は、東恵子の言葉は耳に入らなかったらしい。頷いてはいたものの、彼女の口にした言葉はきわめて見当が違っていた。

「夫婦喧嘩は犬も食わないっていうからね、ほほほっ……」

気楽な笑い声だった。

三人の婦人たちは、唖然として拍子抜けした思いで、つりこまれて笑い声をたてた。そして、返却の理由は、まさしく夫婦喧嘩にあったものと思いこんでしまったのである。

東恵子は、やがて自身が責任ある班長であることを自覚しながら、新入信者の妻に言った。

「奥さん、どんなことがあっても、御本尊様から離れたら駄目ですよ。辛いことがあったら辛いままでいいの、御本尊様に題目だけはあげていきなさいよ。時がたてば必ず解決しますから……」

「大森さん、よかったわね。みんなで、しっかりやりましょうよ。辛い思いをしているのは、あなたばかりじゃないわ。私たちだってみんな同じです。だから一生懸命信心ができるのよ」

奈良川班担当員もこう口を添えたが、大森の妻は無言で頷くばかりである。

三人の婦人たちは、家庭指導を終え、来た甲斐があったとばかり喜んだ。そして挨拶をして帰ろうとしたとき、ガラガラと戸があいて二人の男がはいってきた。

「お晩です」

男の声は嗄れていた。

三人の目は、いっせいにその方に向けられた。彼らは、やや草臥れた外套から粉雪を払いながら、それを脱いだ。そして頭から頬かぶりしていた襟巻をとると、二つの坊主頭があらわれた。

帰りかけた三人の婦人は、あっと声をのんだ。二人は日蓮系の小樽の寺院・妙龍寺の坊主たちではないか。東恵子はこの瞬間、大森十郎夫妻の御本尊返却の理由が、単なる夫婦喧嘩などによるものでないことを素早く悟った。

——なんだ、身延系の坊主たちが陰険な策動で、大森夫妻の信心の邪魔をしていたのか。わかった。こうなればもう一歩も退くことはできない！

東恵子は、たちまち戦闘的な身構えとなった。まず身にまとったばかりの角巻を脱いだ。奈良川スミも、九谷貞枝も、東恵子にならって堅い表情で角巻をとった。洋品店の土間は、一瞬にして険悪な空気が漂いはじめたのである。

「さあ、どうぞどうぞ、おあがりになって……」

大森の妻が、居間のほうから二人の男に声をかけた。四十年輩のあまり風采のあがらぬ男は、じろりと三人の婦人を睨んでいたが、なにか異様な空気を感じたらしい。もう一人の痩せこけた若い男は、目を伏せて婦人たちの背後から居間にまわっていた。——年輩の男は、昨年九月に小樽にやってきて、中風で寝ている寺の住職にかわって執事をしている村木啓山であり、若い男は身延で荒行をして、最近小樽に流れてきた出口景之進という身延系の僧だったのである。

険しい空気のなかで、村木と出口は無言のまま居間にあがった。東恵子たちも居間にもどった。奥からは大森十郎も出てきて驚きの目を瞠った。大森夫妻をはさんで、小樽班の三人と妙龍寺の二人とが、いつか自然と対峙してしまった。七人の人間は、たがいに顔を見合わせたものの、しばらくは誰も口を開こうとしなかった。気まずい空気は、刻々に濃くなって、なにかのはずみで爆発せざるをえない寸前にあった。

厳寒の外では、犬の遠吠えが聞こえる。

ともかく、東恵子たちにとっては、実に思いもかけない事態の惹起といってよい。だが、いざという時には、婦人は強い。こうなっては堂々と折伏して、対決すればよいのだと肚が決まった。彼女たちは、覚悟を決めて、その時の到来するのを待っていたのである。

「ここにいるご婦人がたは？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com